

1月10日「注がれる聖霊」サムエル記上16：1～13

今日は、少年ダビデが神さまによって選ばれ、聖霊が注がれる物語を読みました。イスラエルの最初の王は誰だかご存じでしょうか？サウルです。ベニヤミン族、イスラエル12部族の中で最も小さく弱い部族の出身の若者でしたが、彼は見た目も良く、何より背がずば抜けて高かったので、戦場で彼が先頭に立てば、兵士たちの士気も上がり、周辺の民族との闘いで連戦連勝を重ねました。誰もが優れた素晴らしい王だと思いました。ところが、勝ち続けると人間はだんだんと高慢になるもので、次第にサウルは戦の勝利は自分自身の能力によるものだと勘違いするようになります。ついには目先の欲にぐらみ、敵から取ってはならなかった戦利品を奪い、神さまの命令に背くようになってしまいました。怒った神さまはサウルを見捨て、新しい王を選ぶことにしたのです。神さまの声が預言者サムエルに届きます。「いつまであなたは、サウルのことを嘆くのか。わたしは、イスラエルを治める王位から彼を退けた。角に油を満たして出かけなさい。あなたをベツレヘムのエッサイのもとに遣わそう。わたしはその息子たちの中に、王となるべき者を見いだした。」こうしてサムエルは再び王を選ぶために出かけていくことになりました。

サムエルが神さまに言われて向かった先は田舎村のベツレヘム。村の長老たちは不安な思いで出迎えます。高名な預言者がいきなりやってきたからです。もし、今、急に多度津町にローマ法王が来たらどうでしょう。大パニックですよ？当時のサムエルは同じような存在ですから、彼らの不安も頷けます。サムエルは「主にいけにえをささげに来ました」と長老たちを安心させました。そして、神によって選ばれた者を探すために会食を開き、エッサイとその息子たちを食事に招きました。エッサイの一族はしきたりに習って長男から順番にやってきます。サムエルは最初、長男エリアブに目を留めました。彼はサウルと同じように背も高く、いかにも強そうだったからです。けれども、神さまはサムエルを戒められます。「容姿や背の高さに目を向けるな。わたしは彼を退ける。人間が見るようには見ない。人は目に映ることを見るが、主は心によって見る。」結局、その場に集まっていた人たちの中に相応しい者はいませんでした。そして驚くべきこ

とに、まだ成人にも至らず、会食の場に招かれてすらいなかった、羊飼いの少年ダビデが次のリーダーとして神さまに選ばれたのです。サムエルがダビデに油を注ぐと主の霊がダビデに激しく下るようになりました。

このダビデの選びの物語は神さまの選びの不思議さを教えてくれます。
「容姿や背の高さに目を向けるな。わたしは彼を退ける。人間が見るようには見ない。人は目に映ることを見るが、主は心によって見る。」とは有名な言葉ですが、神さまは私たちが人間が選ぶような基準では選ばれないのです。昨年12月にキリスト新聞社から『クリスマスへの旅路』という説教集が出されました。若い世代の牧師たちによって書かれた新時代の説教集です。執筆者に選ばれた方の一人は私の学生時代の1つ上の先輩ですが・・・学生時代は「変わり者」で有名な人でした。ファッションセンスや佇まいが独特で、神戸のハロウィン仮装イベントで優勝したこともあります。「どんな牧師になるのだろう・・・」と皆が期待（心配）していたら、独特の感性と着眼点で素晴らしい説教を語る牧師になり活躍しておられます（ちなみにこの説教集に載っている彼女の説教タイトルは「硬直死体とクリスマス」・・・独特でしょう?）。神さまはその人に与えられた賜物を十分に用いられるなと思います。

皆さんの中には、洗礼を受けたにもかかわらず自分自身が神さまに選ばれたことに自信を持たずにいる方がおられるかもしれません。もしくは、今、信仰の壁にぶつかって「自分など神の選びに相応しくない」と思っている方がおられるかもしれません。けれども、私たち人間の目から見た、力強さ、賢さ、が必ずしも神さまの目に適うわけではありません。神さまは弱くて貧しい羊飼いの少年を次の王を選ばれるのです。イエスは学のない漁師たちを弟子とされ、イエスの一派を捕らえて迫害していたパウロは伝道者とされるのです。イエスが弟子たちに語る言葉です。「ヨハネ 15：16 **あなたがたがわたしを選んだのではない。わたしがあなたがたを選んだ。**」

今日、もう一か所日課によって選ばれているのはマタイ福音書に記され

たイエスが洗礼を受ける記事です。救い主イエスはバプテスマのヨハネから洗礼を受けます。ヨハネはイエスに洗礼を授けるなど「恐れ多い」と断りますが、イエスに促されて、洗礼を授けます。イエスがヨルダン川で洗礼を受けると空からまばゆい光が差し込み、神の霊が下りました。そしてこんな声が聞こえてきます。「これはわたしの愛する子、わたしの心に適う者」私たちが信仰者として選ばれる、洗礼を受けるということの意味はこの言葉に集約されていると思います。私たちは何よりもまず神さまに愛されているのです。誰であっても無条件に。この神の愛を自覚し、受け止め、応えて生きていく、そう決意するのが洗礼を受けるということではないでしょうか。

このように私たちに注がれる神の愛に対して、私たち人間の社会には敵対する面があります。子ども達を育てる学校ではまだ未熟なうちから比べられ、誰か人より優れた点があれば、皆に褒められ愛されますが、そうでなければなかなか認めてもらえません。社会に出て働くようになれば一層その残酷さは際立ちます。私たちはいつも人より優れた面はどこなのか？ 一体自分は何をすれば人の役に立てるのか？ を考え、それを生かしていく道を探さなければなりません。それが見つからない者は、社会という競争の場から退場せざるを得なくなります。この残酷さが私たちに自分を磨かせ、一層良くしていくと言え、聞こえは良いのですが、それはその社会である程度成果を残せる者の言い分で、認められなかったり、大きな傷を負ったり、疲れたりした者は社会からは遠ざけられていくのではないのでしょうか。

この社会の競争原理を私たちの基準としてしまうと、私たちは「神の愛」に敵対的になっていきます。どんな人であっても愛される？ 戯言だろう。何か人より優れていなければ生きていく価値がない、と他者と自分自身の存在を常に天秤にかけるようになります。人の存在を否定することでしか自分の存在を肯定できなくなります。神の愛を否定するようになります。でも聖書は一貫して私たちのそんな考えが誤りであることを伝えます。神さまは大国ではなく小さな小さなイスラエルに目を留めます。彼らは強い

からではなく、弱くて小さいから選ばれたのです。神さまは、辺境の羊飼
いから王を選ばれます。彼らが最も王に相応しくないからです。そして救
い主も同じくベツレヘムのエッサイの家系から選ばれます。最も救い主ら
しからぬところから救い主は現れるのです。

イエスはヨルダン川に頭まで沈める洗礼を受けました。これは最も古い
洗礼のやり方で、一度水に全身を浸かることで古い自分に死に、新しい自
分として生きていくことを示します。古い自分に死ぬとは自分には愛され
る資格などない、と神さまの愛を拒否していた自分を脱ぎ捨てて、天から
の「これは私の愛する子」という声を受け入れることです。私は愛されて
良いのだと認めることなのです！

愛を受け入れた者には自然とその愛に応えたいという新しい命が芽生
えます。これまで愛されたい、愛して欲しいと求めてばかりいた人が、人
を愛する、愛を注ぐ者へと変わっていきます。それが新しい命に生きる
ということです。新しい生きる意味、愛に生きるという使命に生きるよう
になるのです。もちろん人間ですから一足飛びに変わるわけではありません。
常に自分の罪と葛藤しながらの歩みにはなるでしょう。それでもその
葛藤も含めて、誰かを愛するために生きていくようになること、これが聖
霊を注がれる私たちの新しい歩みのスタートなのではないでしょうか。新
しい2021年も始まりました。今日も御言葉を受けて、愛に押し出されて、
共にその歩みへと出ていきたいと思います。